



学校だより

横浜市立釜利谷中学校

発行日 2020年1月10日(金)

発行者 学校長 栗田智則

所在地 金沢区釜利谷南3-5-1

電話 784-7311 FAX 783-9762

URL <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/kamariya/>

目標を明確にしよう！

校長 栗田智則

2020年(令和2年)が明け、正月は晴天に恵まれたため初日の出を見ることができました。素敵な初日の出を見ながら、釜利谷中学校生徒一人ひとりの無事故・大成長を祈っていました。今年はオリンピック・パラリンピックイヤーとなり、日本代表選手の活躍が今から本当に楽しみです。厳しい寒さや季節外れの温度差が続きますが、睡眠や食事、手洗い、うがい、部屋の換気、マスク着用などに注意をしながら、体調には十分に気をつけて過ごしていきたいものです。そんな中でふと梅の木に目をやると、つぼみを膨らませており、小さな春の息吹に、とても元気づけられます。



さて、お正月の名物となった箱根駅伝。毎年、名勝負が繰り広げられ多くの感動を与えてくれています。今年は気象条件も良かったのか新記録が多く出た大会となりました。沿道で応援をしていると、たくさんの観衆が大学名や選手の名前を連呼して、走っている選手を後押ししていました。20km以上の距離を激走し、ふらふらになりながらも次の仲間にタスキを渡すために懸命に走ろうとする姿。ものすごい力走で前の走者を次々と追い抜く姿。給水係のチームメイトが数十メートル伴走し、励ましの声をかけながら水を手渡し、それを笑顔で受け取る選手の姿。選手のタイム計時をしながら前後の大学とのタイム差を計算して情報を伝達し共有し合っている姿。東京大手町でのゴールの瞬間など、さまざまなドラマやエピソードがあり、自然と「がんばれ！」ということばが出てきます。そして当日を迎えるまでに、チームとして立てた目標達成のために努力した姿や、裏方で支えた学生たちの熱き思いや姿に感動をします。タスキをつないで走っている選手は、往路復路を含めて各校10名ですが、それを支える多くのチームメイトの存在を無視することはできません。大学を代表して走る選手たちが、力を発揮できるように、チームの中での自分の役割を自覚し、その中で最大限にできることを着実に努める姿は、まさにひとり一人が箱根駅伝における主役であると感じます。



昨年引退したイチロー選手は、『努力せずに何かできるようになる人のことを「天才」というのなら僕はそうじゃない。努力した結果、何かができるようになる人のことを「天才」というのなら、僕はそうだと思う。人が僕のことを、努力もせずに打てるんだと思うなら、それは間違いです。』『大切なのは、自分のもっているものを活かすこと。そう考えられるようになると、可能性が広がっていく。』『少しずつ前に進んでいるという感覚は、人間としてすごく大事。』という名言を残しています。新たな年がスタートしたことで、新たな決意をした人も多いと思います。「今年は、こんな一年にしたい」「あんなことにチャレンジしたい」など、目標を明確にして、自ら決意することはとても大切なことです。まずは学年のまとめとなる3学期をどのように過ごすか。そして、次年度をどのような姿でスタートするか。自分の成長した姿や成功した姿をイメージして、基礎・基本を大切にしながら努力を重ね、自分自身の可能性を信じて、今できること・今からできることを着実にやってほしいと願っています。

◇吹奏楽部が出演しました

12月8日（日）に第19回金沢区小・中学校音楽祭（第31回金沢区民文化祭）が金沢公会堂で開催されました。吹奏楽部が、CENTURIA～Overture for Band～他4曲を演奏発表しました。参加団体は区内より選抜された次の7団体です。

<参加団体>

文庫小学校特別音楽クラブ
西金沢学園合唱部
富岡小学校特別合唱クラブ
高舟台小学校特別合唱クラブ
釜利谷中学校吹奏楽部
富岡中学校吹奏楽部
横浜中学・高等学校吹奏楽部



◇一日税務署長として行事に参加しました。

12月19日（木）横浜南税務署において、税についての作文コンクールにおいて東京国税局長賞となり表彰された3年生が、一日税務署長を務めました。当日は、署幹部や団体長との名刺交換、署長訓示、記念撮影、インタビュー（マスコミ、署内報）等を行いました。その様子は、J:COM 南横浜でも紹介されました。



◇区民栄誉賞の受賞

金沢区賀詞交歓会が1月7日（火）金沢地区センターで晴れやかに開催され、地域の代表で出席された皆さまに新年のご挨拶をさせていただきました。席上、令和元年度金沢区民栄誉賞（文化、スポーツ、その他の分野において顕著な功績をあげ、金沢区民に夢と希望と感動を与えてくれた区民を表彰する賞）の表彰式がありました。

個人に贈られる「牡丹賞」に、3年生が表彰されました。昨年8月の全国こどもチャレンジカップ全国大会のチャレンジサーキットエアロビクスのユース部門で優勝したことが認められました。また、団体に贈られる「山桜賞」には、2年生が所属するFUN FUN ROCK（競技エアロビック）が表彰されました。全国こどもチャレンジカップ全国大会のエアロビクス部門で優勝した功績が認められました。今後、益々の活躍を期待しています。



◇青少年読書感想文全国コンクール横浜地区審査

2年生の感想文が、自由読書の部で**優秀賞**となりました。

心を描く水墨画

釜利谷中学校二年

静寂の中、墨の匂いが漂う部屋で、真っ白な世界に筆をすっと走らせる。私の目は知らぬ間に活字ではなく、その線を追っている。

砥上裕将さんの「線は、僕を描く」は水墨画が軸となる物語である。私は水墨画のことを全く知らなかったにも関わらず、その水墨画の描写があまりにも鮮明で思わず息を飲んだ。著者である砥上さんのことを後から調べてみると、実際に水墨画家であることを知った。本当に水墨画のことを分かっているといこれほどリアルな描写は出来ないと思った。それが登場人物達の性格まで表す要素にもなっているのだ。こんなに映像が脳裏に浮かぶ本を私は知らない。

主人公の青山霜介は高校生の時に交通事故で両親を失って以来、心の時が止まったまま大学生になった青年である。周囲とは適度な距離を保ち、ひとりぼっちだと感じながら暮らしていた。そんな生活の中で、水墨画の巨匠である篠田湖山に出会い、ひよんなことから水墨画の才能を見出され内弟子になるところから始まる。

湖山先生の霜介への指導は、水墨画を通して人としてとてもシンプルなことを教えているように私には思えた。真面目であることは大事だけれど、それが時には自分を追い詰め心を閉ざすことになるということ、心を開放して自分らしく自然でいることも忘れてはならないということ自分を描くことで霜介に伝えようとする。また、同時に湖山先生が霜介に言った言葉が私は印象に残っている。水墨を描くということは、ひとりとは無縁だということ、自然との繋がりを感ずること、その繋がりと一緒に絵を描くこと、まるで霜介に「もう孤独に苦しまなくてもいいんだよ。」そう言っているような気がした。同じような孤独を味わったことのある湖山先生だからこそ伝えられることだったのだと思う。

霜介は一度全てを失い、真っ白の状態を知っている。そして、真っ白な紙に水墨を描くことで自らの過去と向き合うようになっていくのである。私も不思議とそこに描かれていく絵と一緒に眺めているような感覚になる。課題に立ち向かうごとに、それまで見ようとしてこなかった心を徐々に取り戻していく霜介の成長は、私も霜介の周囲の人々と同じように見守る気持ちだった。この物語を読むと人としてどうあるべきか考えさせられる。登場人物には嫌な人が一人も居ない。大学の友人や、水墨画を通し気持ちを理解しあえる才能溢れる絵師たちがみんな霜介に優しいのだ。悲しみを抱える霜介とも良い距離を保って接してくれる人ばかりだ。霜介には悲しい運命の過去があるが、その悲しみから救い出してくれた湖山先生との出会いも、一生懸命に向き合える水墨画との出会いもまた運命なのだと思う。

私も好きだと思えることはいくつか思い浮かぶが、それを運命と呼んでいいのかは正直言って迷いがある。もっと惜しみなく時間や情熱を捧げられる「何か」に出会うために日々学んでいるのかもしれない。

湖山先生や水墨画との出会いによって霜介は別人のように変わった。最初は自分自身が何者なのかすらわからなかった孤独な彼が、線を描くことで幸せを感じ、ひとりじゃないと感じるまでになった。私自身は未知の世界に足を踏み入れることがとても苦手なタイプだ。しかし、まだ知らない世界に自分が夢中になれることや、まだ出会っていない人との素晴らしい出会い、自分が大きく成長するチャンスが眠っていると思うと「思い切ってやってみる」ということも大事かもしれないと思うようになった。そしてこれからのことだけでなく、今現在私の周りにはいる家族や友達、先生など様々な関わりの中で得ることが、この先どんな道へ進んでいくきっかけになるかわからないということも同時に思うのである。色々なことを感じて生きていくことはとても疲れるけれど、それを怠けてはいけない。その上で自然体でいるなんて私にはまだよくわからないけれど、「まだわからない」というのが今の私の自然な状態なのだと思う。いつか私にも「繋がり」の中で生きていくことを実感する瞬間が訪れるといいと思う。

今、霜介の描くとても儂げでありながら生き生きとして命を吹き込まれたような墨の花が私の心にも咲いている。そしてそれは、読む人によって心に描く線はきっとそれぞれ違うだろう。これから霜介がどんな線を描いていくのか本当はもっと見ていきたい。本当に水墨画のように凜とした、静かで優しい気持ちになれる素敵なお話だった。

※砥上裕将「線は、僕を描く」

◇横浜市立中学校作文コンクール

2年生の作文が、生活・随筆の部で**優秀賞**となりました。

十四歳の今思うこと

釜利谷中学校二年

私が合唱部に入ったのは歌うことが大好きだからというわけではない。ではなぜ入ったか。事情があり運動部には入れず、消去法で入れる部活の中から選んだから。合唱部にはもちろん歌うことが大好きで入ったメンバーもいる。しかし、色々な事情から私と同じように部活を選んだメンバーもいるのだ。両者に温度差があるのはしょうがない。でも合唱は一人で出来るものではなく、みんなで一つになってするものだから、私は自分なりに出来ることをきちんとしているつもりだ。週に一度練習を休まなければならない日があるが理由があるのだ。さぼっているわけではない。学校行事で合唱部の披露をする時は、ピアノ伴奏も短時間で練習した。しかし、やはり温度差は感じる。自分に出来ることはやっているのに、そこはあまり認めてもらえないように感じてしまう。部活中ににらまれたり、陰で文句を言われたりしていることもあるようだ。しかし、一生懸命やっている風なメンバーは、本当に一生懸命やっているのか。練習に必要な楽器の準備など、横目で見ているだけのメンバーもいる。私のようなメンバーがやればいい。そう思っているのだろうか。

出来ることなら、私だって運動部の友達のように汗を流して中学生らしいキラキラの青春がしたかった。葛藤もあるが、それを言っても何も良くなる。今、自分に出来ることをやって、せっかく仲間になったメンバーと出来れば三年間楽しく過ごしたいと思っている。

と、これは単なる愚痴ではない。表と表、表と裏、裏と裏。何が本当の自分のなのか、何が本当の友達なのか分からなくなることもある。部活のことだけではないが、日々感じている十四歳の難しさだ。みんなそれぞれがきながら一生懸命なのだ。

十四歳。一の位を切り捨てれば十歳。切り上げれば二十歳。子供と大人が半分半分の思春期の私達。人間関係の難しさを感じたり、勉強に追われたり、やらなくてはならないことが沢山の毎日だ。早く大人になりたいと思うこともあれば、小さい頃に戻りたいと思うこともある。でも大変なことや辛いこともある分、楽しいことや頑張った時の達成感も沢山あるのだ。

ニュースで同じ世代の人のいじめや自殺などを耳にすることが多い。私自身も人間関係の難しさを感じることもあるが、人に認めてもらうためにはまず、自分自身をしっかり見つめ自分を認める、そして同じように人のこともしっかり認める。良いところを尊重し悪いところは改めていく。なかなか難しいことではあるが、そうやってお互いに成長しあいながら十四歳の今を、学校生活を、毎日を過ごしていけたらきっと色々なことが良く変わっていくのではないかな。合唱部で来年最後の歌を歌う時には、入って良かったと思えるように出来たら良いと思う。この部活で三年間過ごした時間とメンバーに感謝の気持ちで卒業出来るように。

まだまだ色々悩んだり、失敗したりすることも多いと思う。でもそれでもいいじゃないか。だって私達はまだ十四歳。子供と大人の半分半分なのだ。失敗しながら沢山のことを学び、スポンジのように色々なことを吸収し、自分の心の栄養にして大人に近づいていけたら、きっといつか今感じている難しさや悩みを笑って思い出せるようになるのだろう。大人になったら今感じているようなことは感じられなくなってしまうこともあると思う。だから今、今しか感じられないことを大切に、十四歳を生きていこう。

◇ 1月の主な行事予定

- | | |
|----------|----------------|
| 1月16日(木) | 私立高校推薦出願 |
| 1月22日(水) | 私立高校推薦入試 |
| 1月24日(金) | 私立高校一般出願 |
| 1月29日(水) | 公立高校出願 |
| 1月30日(木) | 個別支援級 横浜市合同学芸会 |
| 2月 3日～4日 | 3年生学年末試験 |

<お知らせ>

☆第34回卒業証書授与式は、3月11日(水)に挙行いたします。

御来賓の皆さまには改めて、御案内させていただきます。